で大事なのは、自分で仲間も許すこと。仲間を、どれだけカバーできるかとても大切で、それ自体としての中身を育て、強くすることにつながっていくと思います。

特に、理不尽な世界で、どれだけ強くても、いいチームになれるわけではないときも悪いときもあって、最善の思考をしつづけるときは負ける。それで仲間を大切にできるだけだし、団体戦は個人の倍も成長できると思います。

麻雀の良さはどういうところにあると思いますか。

始めたばかりの頃、先輩たちに呼ばれて、一緒に話をしながら打っていくことがありました。すると、人の癖などを見ながら、こういうやつなんだなってもらえて。いつも仲良くなれたことをうれしく思っています。

今、場する選手たちにメッセージをお願いします。

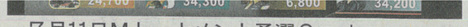
通して、かけがえのない瞬間やかけがえのない思いできると思います。そして、これからの人生とも忘れられない瞬間を運んでくれます。

麻雀を謳歌していけば、と思います。

満以上が必要で、よほど良い手でないとアガれない。なので、猿川さんが追いかけて放銃するリスクは高くない。リーチ棒を出して一時的に2着に落ちるけど、トップ目の前田さんがオリていそうなので流局でもまたトップになれる。（リーチして）茅森さんからのロンを逃さない選択をしたのは見事だった」

2人がリーチをかけた結果、茅森がツモれば茅森と日向、猿川がアガれば猿川と前田が通過する状況になった。アガリ牌は2人とも5、8ピン。どちらがつかむかで、勝者と敗者が逆転する。「着順の並びが少し変わるだけで結果が百八十度変わるのが、トーナメントの面白さ」と朝倉プロは力を込めた。

決着は15巡目。8ピンをツモった猿川に軍配が上がった。リーチ、ツモ、赤1、裏3をアガった猿川と前田が勝ち抜けた。（前田健汰）



7月11日Mトーナメント予選2ndステージD卓第2試合、南4局13巡目の猿川真寿の手牌©いずれもABEMA

■Mリーグ　2018年、麻雀を頭脳スポーツ化させる理念を掲げて発足したプロリーグ戦。企業と契約を結んだMリーガーによるチーム戦で、選手には違法賭博との決別が課されている。9チームが96試合ずつのレギュラーシーズンを戦い、上位6チームによるセミファイナル、上位4チームによるファイナルを経て優勝チームが決まる。

朝日新聞のデジタル版の麻雀ページでは、より詳しい記事を掲載しています。

◆次回の「月刊Mリーグ」は8月28日に掲載予定です。

世界麻雀TOKYO 内川が個人戦優勝

「世界麻雀」の個人戦で優勝し、笑顔を見せる内川幸太郎

30以上の国や地域の選手が参加した麻雀の世界大会「世界麻雀TOKYO2025」が今月上旬、東京都内で開催された。256人が参加した個人戦は、麻雀のプロリーグ戦「Mリーグ」で来季から風林火山に入る内川幸太郎が優勝した。

32人が通過できる予選を33位と0.5ポイント差の32位で通過した内川。「ぎりぎりで通過して無欲でいたら、優勝できた」と振り返った。

45チームが参加した国別対抗チーム戦は、ポルトガル・スペインの混合チームが優勝をつかんだ。日本代表は8チームが出場し、最高成績は3位だった。（前田健汰）

「桐島です」へ至る道 想像ふくらませ

俳優 毎熊克哉 × 監督 高橋伴明 × 脚本 梶原阿貴

映画「桐島です」に主演した、（右から）毎熊克哉、高橋伴明監督、脚本担当の梶原阿貴＝7月4日、東京都新宿区

映画「桐島です」

過激派グループ「東アジア反日武装戦線」に共鳴し、企業爆破テロに関与した桐島聡。1975年に指名手配されたが捕まることなく昨年に病死した。そんな桐島の人生をモチーフに描いた。桐島は逃亡生活の中で女性歌手と出会い、ほのかな恋が芽生えるのだが……。

連続企業爆破事件で指名手配され、約半世紀の逃亡の末、昨年1月に70歳で病死した桐島聡元容疑者（以下、桐島）の人生をモチーフにした映画「桐島です」（公開中）が話題だ。桐島役を演じた俳優の毎熊克哉(38)、監督の高橋伴明(76)、脚本を担当した梶原阿貴(52)が作品について語り合った。

同じ桐島を主人公にした映画「逃走」が3月、先に上映されたが、監督の足立正生(86)と高橋には浅からぬ縁があった。2人は大学時代、学生運動をし、若松孝二監督（故人）と一緒に映画を作った。「実は若い頃、足立さんにパレスチナに一緒に行かないかと誘われ、断ったことがある。僕は映画を撮りたかったから」と高橋。

その後、足立はパレスチナにわたり、1974年に日本赤軍と合流。政治運動をし、レバノンで逮捕された後、帰国し、映画監督として復帰した経緯がある。

2人の映画は同じ桐島を主人公にしていてもアプローチが大きく異なる。高橋は「桐島という男の青春時代から70歳で亡くなるまでを描いた。逃走劇だけではなく、人間的なやさしさがあるやつだったんだなと想像してもらえれば、ありがたい」と話す。

その高橋から、映画の脚本を「5日で初稿を仕上げてほしい」とオファーを受けた梶原。実はそれ以前から桐島についての情報を集め、事件のスクラップをしていたという。

映画公開と同時期に「爆弾犯の娘」という自叙伝を出版した梶原。本の中で父親がある爆破事件に関与し、指名手配され、14年にわたる逃亡の末、逮捕された経緯が描かれていた。

「子どもの頃に見た父の手配写真の隣に桐島が載っていた。この

青春時代から最期まで 逃走劇だけでなく人間味描く

脚本は私にしか書けないと思った」と梶原。桐島が住んでいた場所や立ち寄ったであろう現場に取材に行ったら、「足立さんと鉢合わせし、意識したりして」と笑う。

梶原の本を読んだ毎熊は「逃亡者のリアルが書かれ、本と映画がオーバーラップした」と語る。

「テロリスト」である桐島を主人公に映画をどう描くかに興味があり、出演したという毎熊。

ニュースで連日報道され、桐島の顔と名前は知っている人は多い。「あえてキャラクターをつけず、どこにでもいる普通の人として演じた」

実は桐島と同じ広島県東部の出身で自身も備後弁を使う。脚本はすべて標準語で書かれていたが、桐島も学生時代は備後弁が残っていただろうと想像し、セリフになまりを付け加えたという。

桐島と同じ過激派グループ「東アジア反日武装戦線」のメンバーで一緒に逃亡する友人、宇賀神寿一（後に逮捕）も映画に登場する。

桐島の実像はわかりにくい。梶原は宇賀神を取材し、弱い立場の人を助けたくて学生運動にのめり込んだ桐島のやさしい人柄も脚本に盛り込んだという。

映画のクライマックスは、がんに倒れた桐島が病室で「桐島です」と名乗るシーンだ。

「この撮影は一番最後にやった。というか、最後じゃないと撮れなかった。毎熊君がどう表現してくるのか。それだけを楽しみにしてきた」と高橋。いまだに正解はわからないという。

ラストをどう演じたか。毎熊は語る。

「そこへたどり着くために日々の撮影の過程があり、このシーンは想像を超えた先に何かがあるんじゃないかと思った」（森下香枝）